魔法先生ネギま～悪の正義～

unlimited

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法先生ネギま～悪の正義～

【Ｎコード】
Ｎ１１１３Ｙ

【作者名】
ｕｎｌｉｍｉｔｅｄ

【あらすじ】
『正義』に絶望した少年は決意した。少年は自らの理想、自らの願いの成就のため『悪』である事を選ぶ。

オリ主チート原作＆原作キャラブレイク一部アンチです。
苦手な方はお戻りください。

プロローグ

プロローグ

ＳＩＤＥ　とある夜のある少年の決意

『正義』だと・・・？

こんなものが『正義』だと言うのか

こんな、何の罪も無い人々を悪に仕立て上げ

力無き弱者を征服し

蹂躙し

略奪し

殺戮する――――――

こんなことが『正義』だと言うのか

赦さない

『正義』という名を免罪符としてを掲げる外道が

『正義』を掲げるものよ、聞け

我はこれより貴様らの敵、即ち『悪』となろう

我は今宵、この時をもって

『この世全ての悪(アンリマユ)』となろう。

プロローグ（後書き）

ちょっと色々改変しました。ごめんなさい。
基本的に作者の妄想及び自己満足で話が進んでいきますのでご了承ください。

キャラ設定１

ルクス・アヴェスター

年齢数えで１０歳

本作の主人公。
生まれつき膨大な魔力を持っていたが人形遣いとしての魔法以外殆ど使えず、物心ついた時から家にあった出所不明の異世界の魔導書で魔術について学ぶ。魔法が使えないことに劣等感は無く、むしろ独学で覚えた自己流魔術しか使えない自分をもはや魔法使いだとは思っていない。
性格は温厚でお人よし、たまに空気が読めないことがある。だが裏では冷徹で残酷なところもある。
容姿は同年代のネギよりやや小柄で中性的な顔立ち。やや長めの茶髪と、翡翠色の瞳。ただし魔術使用時に一時的に銀髪、琥珀色の瞳になる。
趣味特技は器用な指先と独特な魔術センスを活かした魔法道具及び自動人形の作成。
作成した魔法道具は一部だがまほネットで通信販売している。
なお６年前にある事件に巻き込まれ両親と姉を亡くす。

備考
会話の上ではボケ３割ツッコミ７割。（自称）

今現在主に使用する魔術例

ガンド本来は対象を人差し指で指差し、呪うことで体調を崩させる、というもの。だがそのフォームゆえ「ガンド撃ち」と呼ばれる。本

来は呪詛の様な物だが、魔力を収束させることにより物理的破壊力を持たせる事が可能。

強化魔術
物質及び肉体の強化が可能。ただし肉体強化は自身のみ可能。

投影魔術
魔力を用いて物質を作り出す。ただし生物は作れない。

魔眼変化
自らの眼を魔眼に変化させる。基本的にどんな魔眼にでも変化させられるが高位になるにつれ効果時間と肉体的負担が大きくなる。専ら使用するのは術式解析（魔力による結界呪詛のつくりを目視によって解析する）、霊視等である。

概念付与魔術
既存の物質や投影で作り出した物質に概念を持たせる。

魂の分割化
人型をしたものに自らの魂の一部を付与し、自らの自由もしくは自動で動く自動人形（オートマタ）とする。人形が活動不能時には分割した魂は持ち主の下に自動的に戻る。

降霊魔術
あらゆる時代から霊魂を召喚し、任意の対象に降ろす魔術。傀儡とする際には人格等が邪魔になる可能性があるので基本的に降ろした霊のスキルと能力のみ上乗せされる。

転送魔術

予めそれ用の刻印を刻んだ物質を任意の場所へと転送する。生物の場合はその固体が一度でも行った場所に限り可能。

魔力貯蓄
魔力を自分の持ち物や肉体に貯蓄する。ルクスは就寝前にその日の余剰魔力を不可視の刻印状態にして肉体に刻み込んでいる。それと自作の装飾品や魔法アイテム等にも貯蓄している

魔力開放
武器・自身の肉体に魔力を帯びさせ、瞬間的に放出する事によって能力を向上させる。絶大な能力向上が得られるが魔力の消費が通常の比ではない為、今現在ではもって１０分程度である。

魔術発動時の自己暗示は『術式開始（ゲットセット）』

キャラ設定１（後書き）

とりあえずこんな感じです。
魔術は基本的にｆａｔｅ系からパロってます。
また色々と書き換えることがあるかもしれませんのでご了承ください。

第一話

第一話

ＳＩＤＥ　ルクス

はじめまして、皆様。ルクス・アヴェスターと申します。
突然ですが、この度めでたくメルディアナ魔法学校を卒業出来ました。
これで退屈な授ｇｙ）じゃなくて大嫌いな魔ｈ）ゲフンゲフン、失礼
まーとりあえず今の環境からおさらばです。

でも自分でもよく飛び級で卒業できたなと驚いております。僕は魔法学校の人間ですが
魔法は一部を除いて殆ど使えませんし、色々な先生方が言うには少し性格が歪んでいるそうです。
でも座学や体術等の成績は主席だったようなので、その辺りを評価されたのかもしれません。

しかし真面目に魔法使いとして学ぶ生徒達には僕の待遇は少し目に

余るものだったのかもしれません。
なんせ卒業式の時に僕の名前が呼ばれた瞬間にホール内の空気が一瞬凍りつきましたよ。
で、壇上まで卒業証書を取りに行くときの回りの視線が痛いこと痛いこと。ちょっと泣きそうになったりならなかったりしました。

そして証書を受け取ってから自分の席に帰るときなのですが、主席（総合評価）で卒業したネギ・スプリングフィールド君なんて僕をすごく睨んでましたからねー。そりゃぁ彼とは価値観の違いとかで時々衝突していましたけど、ここまで睨まれる事はないと思うんですよ。もしかして、一部の座学で主席が取れなかったこと恨んでるんでしょうか？良いじゃないですか、僕なんて座学以外の魔法実技評価は殆ど赤点ギリギリですよ？

とまあ卒業式のことはこれくらいにして、僕は今学校の渡り廊下で卒業証書を眺めています。
校長の説明によると、授与後しばらくすると卒業後の修行場所が浮かび上がってくるそうです。
ぶっちゃけ魔法使いとしての修行はどうでもいいのですが、とりあえず学校の予算でここ以外の場所に行けるのなら儲けものです。

と、やっとうっすらと文字が浮かび上がってきました。えーと、何々・・・・・・

『Ａ　ＴＥＡＣＨＥＲ　ＩＮ　ＪＡＰＡＮ．』

・・・・・・・・・・・・・・・・・・はぁ？

『日本で先生をすること』なんですかこれ？証書のバグでしょうか
？数えで１０歳程度の子供が学校の先生だなんて・・・

とりあえず校長に聞いてくるとしましょうか

第一話（後書き）

自分で書いてなんですが
何、この主人公・・・ｏｒｚ
あと感想とかレビューとかくれるとうれしいです

第二話

第二話

ＳＩＤＥ　ルクス

バグっている卒業証書を持って僕は校長の下を尋ねました。

「校長先生ーーー！、この卒業証書バグってますよーーー！！」

校長の後ろから叫びました。すると校長の影になっていて分かりませんでしたが、他の生徒と話をしていたようです。

げ、ネギ達だよ・・・。

僕は苦笑いをしながら校長に近づき、話をしていた生徒達に会釈をして校長との会話に割り込みました。

「で卒業証書がバグっているみたいなんですけど、どうやったらリセット出来るんですか？」

僕は証書のあっちこっちを押しながら尋ねた。その様子に校長はため息をつきながら

「卒業証書はバグらん！リセットも出来ん！！卒業証書に浮かび上がったことなら絶対じゃ！！！」

マジで！？じゃあこれ考えた人って何考えて・・・あぁ、そういうことね・・・

「じゃあ、この修行内容考えた人がバグっているんですね。わかります」

僕は校長の顔を見上げながら笑顔でそう言った。

ＳＩＤＥ　校長

卒業式が終わり、わしは校長室のほうへ帰るために渡り廊下を歩いていた。するとそこにネカネとアーニャ、少し遅れてネギがやってきた。話を聞いてみると、修行内容のことのようじゃった。ネギは『日本で先生をすること』と出たみたいじゃ。

「ほう、『先生』か。だが、卒業証書にそう書いてあるのなら決まったことじゃ。立派な魔法使いになるためには頑張って修行してくるしかないのう。まあ、頑張んなさい」

と彼らに話していた。そこに・・・

「校長先生ーーー！この卒業証書バグってますよーーー！！」

ルクスがやってきた。

ルクスはわしが振り返った時にネギの顔が見えたのでバツの悪そうな顔をしたが、苦笑いをしながらわしの下にきて

「で、卒業証書がバグっているみたいなんですけど、どうやったらリセット出来るんですか？」

と言いおった。このクソガk）いや、こやつめは・・・

わしはため息をつきながら「卒業証書はバグらん！リセットも出来ん！！卒業証書に浮かび上がったことなら絶対じゃ！！！」

と怒鳴ってやった。

するとこやつは、意外そうな顔をしたあと何かに納得したように

「じゃあ、この修行内容考えた人がバグっているんですね。わかります」

とのたまりおった。口の減らん奴じゃ！！

ＳＩＤＥ　ルクス

校長に『修行内容考えた人バグってる』と言った後に気づきました。

“修行内容考えているのは主に校長”だっとと言う事に。

まあ、言ってしまったことは仕方ないことです。笑顔でごまかすことにします。
たまに空気が読めない発言をしてしまうのは僕の悪い癖ですね。

笑顔での誤魔化しが効いたのか、校長は僕とネギを交互に見てからこう言いました。

「二人がいく修行先の学園長はわしの友人じゃからの、安心してがんばんなさい――――」

とまとめてその場からそそくさと引いていきました。

ってネギも一緒なんですか？

何となくネギ達のほうに目を向けると、

微妙に機嫌の悪そうなアーニャ

苦笑いのネカネさん

何かすっごく睨んでくるネギ

・・・

・・・・・・

・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・まあ、何とかなるかな？

第三話

第三話

SIDE　ルクス

ネギの突き刺さるかのような視線を背に受けながら、僕はその場を後にしました。
学校の裏の山にある家に帰り制服と卒業証書を置き、僕は早速日本への荷造りを開始しました。
一応予定としてはあと二ヶ月近くあるみたいなのですが、二ヵ月後に行ってイキナリ先生&日本での生活をやれと言うのは結構きついものがあるような気がするので、僕はネギよりも先に日本に行ってある程度の準備うんぬんを済ませて置こうと思っています。
例えば同じ日に二人で日本に到着して同じ場所で生活するに当たって、二人同じ部屋で協力して生活する羽目になりでもしたら、胃に

穴が
開きかねません。ぶっちゃけ一人暮らしでも結構大変だったりするのに、甘えん坊で自分のこともままならないネギと一緒になると考えたら
それこそ悲劇ですよ。修行をすっぽかしてダッシュで逃亡するかもしれません、結構切実に。

そんなこんな考えながら動いてる内に荷物の整理は殆ど終わってしまいました。着替えや魔法アイテムとその他材料、資料ｅｔｃは魔術で空間を拡張した旅行鞄に
全部つめ終わりましたし、大き目の家具等はこの家に置いていきますし、傀儡用の人形はあとで転送魔術で引っ張るとして、あとはまほネットの方の店を・・・

あ、その前に校長に先に日本に行けるように頼まなくてはなりませんでした。ちょっと行ってくるとしましょうか。

ＳＩＤＥ　校長

ルクスやネギ達が帰った後、わしは麻帆良に送る用の二人の書類を

準備しておった。すると突然校長室の扉が強く叩かれ直ぐに勢い良く開けられたのじゃ。

「度々すいませーーーん！ちょーーーっとお願いがあるんですけどーーー！！」

「返事があるまで待たんか！！あと声が無駄にでかい！！」

「はい！5回目くらいから気をつけます！！」

「次から気をつけんかい！！！！！」

わしは大声を出した後、ため息をついてから頭を抱えた。

それを見たルクスは「おや、お疲れですか？もう年何ですし無理は駄目ですよ？」と自分はまったく関係ないかのようにそうほざいた。

「この疲れの原因はほとんどオヌシとのやり取りが原因じゃ！！」

「そんなことよりどうしても頼みたいことがあるんです、校長先生。」

・・・・・・・・・・・・・・話を逸らしおってこのくそがk・・・

ここで更に怒鳴ると話が進まなくなりそうじゃから、こやつの話を聞いてやることにした。

聞いてみると日本行きを早めて欲しいということじゃった。一応訳を聞いてみると、至極真っ当な理由じゃった。とりあえず、検討すると

言うことで話を終わらせようと試みた。じゃが・・・

「そうですか、じゃあいつ決まるか毎日挨拶ついでに聞きにきますね。」

毎日こいつにこの調子で来られたら本気で体調を崩しかねん。じゃからわしは数日中には日本行きを決めてやるからと約束してルクスを帰らせた。

まったく・・・本当にやっかいな奴じゃわい・・・。

次の日

ＳＩＤＥ　ルクス

いやー数日中って言うから二、三日は掛かると思っていたんですけどもう日本行きが決まるなんて思っても見ませんでしたよ。

校長もやるときはやりますね。
校長の送ってきた手紙によるとだと日本での下宿先は先方がもう用意してくれているらしいですから向こうでの衣食住は心配しなくていいらしいです。
それと向こうの学校の資料も貰いました。麻帆良学園ですか～写真で見る限りだとヨーロッパの町並みみたいですね～。
とりあえず同封の写真や資料をざっと見ました。おや・・・もう一枚封筒が・・・。

開封すると、明日出発の飛行機のチケットでした。

・・・何か早くないですか？まあ、早く行きたいと言ったのはこっちですから良いんですけど、こんなに速い仕事をされるとまるで僕にさっさとここから出て行って欲しいかの様に勘違いしてしまいますよ。

と、校長をそんなに悪く言うのは止めときましょう。寧ろこんなに早く決めてくれた御礼の手紙くらい出しときましょう。

僕はそう思いながら『開封した瞬間爆音でお礼の言葉を述べる、そして自動的に爆発して消滅する』手紙を校長宛に出すことにしました。

因みに僕が行ったあと、風の噂によると校長室のガラスが全損したらしいですよ。

第四話

第四話

麻帆良学園近郊の駅付近

SIDE　ルクス

いやぁ～まいったまいった。空港から最寄の駅まで行ったのは良かったんですけど、ついうっかり乗り間違えてしまうとはー。いやー三重県まで行ってやっと気づきましたよ～。赤福美味しかったです、うん。

さっき学校側に連絡したら駅のほうまで迎えの人を寄越してくれるって言ってましたし、ベンチに座って茶でも啜りつつ気長に待つとしましょうかねー。

ＳＩＤＥ　近衛　木乃香

さいぜんお祖父ちゃんから電話が在ってお客はんを迎えに行ってくれへんかと頼まれた。
明日菜は珍しく部活だし、あたしも暇やったからすぐＯＫした。
で、今はそのお客はんが待ってるっていう近くの駅まで迎えに行っとる最中なんや
お祖父ちゃんが言うにはお客はんはまだ１０歳の子供って話やった。
あんまり長い時間待たせるのはまずいと思ってあたしはちびっと急いでいったんや。

で、今駅に着いたんやけど・・・お客さんの名前ってなんやろな～？名前も知らんし～？てか男かいな女かいな～？今お祖父ちゃんに電話したら、留守電らしくて繋がらへんかったわ。
しゃーない。見た目１０歳前後のそれっぽい人に手当たり次第声掛けてみるか～。

ＳＩＤＥ　ルクス

待ち始めてから３０分ほど経ったころでしょうか、突然見知らぬ女性の方に声を掛けられました。

「なぁなぁ、君がお祖父ちゃんのお客さんかえ～？

・・・・・・お祖父ちゃんってだれですか。

僕が呆然として彼女の顔を見上げると

「あ、お祖父ちゃんってのは学園長なぁ。で、頼まれて迎えにきたんやけど君がお客さんでいいんかなぁ？」

そう朗らかな笑顔を浮かべながらそう説明してくれた。

「うちはの名前は近衛木乃香や。で、君の名前は何て言うん？」

近衛・・・？確かここの学園長も近衛姓だったな・・・。ああ、じゃあこの人は学園長の孫って事か。

僕はベンチから立ち上がり、姿勢を正して

「はじめまして、ルクス・アヴェスターです。どうぞ気軽にルクスとおよび下さい、近衛さん」

そう言うと彼女は少しだけ怪訝な顔をした、するとそこに丁度彼女の携帯が鳴った。

「はいはい～あ、お祖父ちゃんか～。うん、今会えたで～あ、うんうん、じゃあ直ぐ行くわ～」

そこで通話を止め、僕の方へ向き直り

「今から学園長室に連れて来て～やって、ほな、行こか～」

と言って僕の手を掴んで歩き始めた。

何ていうか、独特な雰囲気の人です。・・・でも、悪い感じじゃないです。

ＳＩＤＥ　近衛　木乃香

お客さんと会ってお互いの自己紹介をした時に、何か変な感じがしたんや。で、ちょっと聞いてみようとした時に携帯がなってもうた。で、お祖父ちゃんが今から部屋に来てって言っとるからとりあえずこの子（ルクス）の手掴んで歩き出したんよ。
その時に、何となくさっき疑問に思った事を聞いてみたんや。

「なぁなぁ、ルクスはお嬢ちゃんでええんよな？」

そういうと、その場でずっこけられてもうた。

しもた、男の子やったんか。いややわぁ何ていうか中性的な感じやったから良くわからへんかったわぁ。
それにしてもナイスリアクションやったわぁ。ええツッコミになれるわぁｗ

ＳＩＤＥ　ルクス

「ルクスはお嬢ちゃんでええんよな？」

思わずずっこけましたよ、ええ。

お嬢ちゃん？僕の何処を見て女の子だと！？髪か？この中途半端なショートカットの所為か！？

と思いながら道端でｏｒｚ状態になりました。それを見ていた近衛さんは

「ごめんなぁ、ほらっ結構かわえかったからついなぁ？飴ちゃんあげるから許してえ？」

と挫折する僕の横にしゃがみ込んで謝ってきた。飴を差し出しながら。

僕は幼児か！？こんなお菓子で誤魔化されるか！！でもくれるなら貰っておくことにする。

僕は立ち上がり、飴を受け取り口に入れる。・・・うん、美味しい。

そんなやりとりをしているうちに僕らは学園長室に着いた。

第四話（後書き）

多分次の更新日は明日中です。

感想レビュー等があればもっと頑張れる気がします

第五話

第五話

学園長室にて

ＳＩＤＥ　学園長

さて、そろそろルクス君が来る頃かのう。そうそう、さっき向こうの校長から届いたばかりの書類があったんじゃった。来るまで見ておこうかのう。

えーと何々、ふむふむ、やはり魔法使用に難があると・・・。じゃが体術や知識は大したものみたいじゃのぉ、ん？要注意事項じゃと？むぅ・・・

書類を読みふけっておると、突然扉がノックされ木乃香が覗き込んで来た。わしは書類を机の中に仕舞い、木乃香とルクス君を招きい

れた。

木乃香はともかく、ルクス君はやや頭を垂れたまま部屋に入ってくる。緊張しとるのじゃろうか、部屋のあちこちをキョロキョロと見回しとる。

そこでわしが彼の名を呼ぶと彼は顔を上げた。

そして彼とわしの目が合った、その時――

ゾクッ――

ルクス君は琥珀色の目でわしを見てきた。書類と同封の写真では翡翠色の目だったはずじゃが・・・

その冷たく射抜くような、いや、見抜くような視線にわしは思わず冷や汗をかいた。じゃがその後瞬きをすると直ぐに笑顔でわしに挨拶をし始めた。

その目は写真と同じ翡翠色をしていた。

うむ、きっと何かの見間違いじゃろう。

ＳＩＤＥ　ルクス

近衛さんが学園長室の扉をノックし、顔を覗き込む。その後直ぐに部屋に招きこまれた。そこには学園長である『近衛　右衛門』が机の向こう側で座っていた。
名前と身分等の情報はあったけど、実物は始めてみた。

それにしても本当にこの人、人間か？特に後頭部が。日本で言うところの「妖怪ぬらりひょん」かと思ったよ・・・。それはさておき・・・

部屋に入った時、外からはわからなかったけど何らかの魔法が感じられた。恐らくは対魔法妨害用の結界だと思う。いつも張ってあるのか今日だけ張って
あるのか、まあ殆ど魔法が使えない僕には関係ないけど。一応魔眼を発動して術式解析だけしておく。ある程度室内を見回すと、校長が名前を呼んでくる。
僕はそのまま、魔眼発動状態のまま学園長と視線を合わせる。さすがは高位の魔法使いだけはあるみたいです。何らかの反応を示しました。僕は瞬きをして
魔眼を解除してから、学園長と挨拶を交わしました。

ＳＩＤＥ　学園長

「はじめまして、ルクス・アヴェスターです。今回は僕の勝手な事情を考慮してくださいましてありがとうございました。」

ルクス君はと言って礼を述べた。うむ、礼儀正しくてなによりじゃ。そして荷物と一緒に持っていた紙袋を手渡して来る。

「これ、つまらない物ですが皆さんでどうぞ。」と「いやいや、修行で来たんじゃしそんな気を使わんでも・・・」

と言いつつわしは袋の中を見た。そこには・・・

『赤福』『草加煎餅』と書かれた箱が入っておった・・・。

・・・・・・・・何でじゃ？

わしはとりあえずそれらを紙袋にしまい、ルクス君との会話を続けることにした。

「なんでも修行のために日本で学校の先生をとか・・・そりゃぁ大変な課題を貰ったのう」

わしは笑いながらそう言った。

「はい、よろしくお願いします。」

彼は笑顔でそう返してくる。うむ、何とかなりそうじゃのう。

「しかし、まずは教育実習とゆうことになるのう、とりあえず一週間後から三月までじゃ。実習が始まるまでこちら側の生活になれておくといい」

っと、わしはそれを言ってからあることを思い出した。うーむ、まだ一人来てないが言っておこうかのう・・・。

っと思っとったら部屋の扉がノックされた。わしはすぐに入ってくるように促した。

ＳＩＤＥ　神楽坂　明日菜

突然、部活中に学園長から電話が来た。何だろ珍しいと思いながら電話に出てみると、部活が終わり次第学園長室に来てくれだってさ。で、部活が終わってからちょっと急ぎ気味で学園長室に走ったのよ。で、扉をノックしたら直ぐに返事が返ってきたから部屋に入ったら、木乃香と見知らぬガキンチョが居たのよ。

「げっ」ってあからさまに嫌な声と表情が出たけど顔を左右に振って誤魔化して学園長に目を向けたのよ。でもその時に何か視線を感じたからガキンチョの方をチラッと見たら、

そいつは私の方を見てて、ニコッと微笑んできたのよ。・・・ッ！？何か一瞬ドキッとしたじゃない・・・。

ＳＩＤＥ　ルクス

突然の来訪者が入ってきました。彼女は近衛さんと同じ制服を着ていました。おそらく近衛さんの同級生でしょうか。僕がそう思っていると彼女は僕の姿を見たとたん、

「げっ」とあからさまに嫌そうな声と嫌そうな顔をしました。

・・・・・・初対面の人間に向かってそれはないでしょう・・・・僕の心がガラスの様に繊細だったらどうするんですか。

で、その後彼女は近衛さんの横に立って誤魔化すかのように顔を左右に振ってました。そこで何故か妙な魔力を感じたので、再び魔眼を使用しようとしました。ですが僕が視線を向けて居るのに気づいたようです。意外と感が良いですね。とりあえず笑顔で会釈しておきました。

ＳＩＤＥ　学園長

さてアスナちゃんも来た事じゃしそろそろ言っておこうかのう。

「うむ、アスナちゃんとこのかに頼みがあるんじゃ、突然で悪いんじゃがルクス君をしばらく二人の部屋に泊めてやってくれんかの？まだ住む所決まっとらんのよ」

「げ」

「なっ？」

ＳＩＤＥ　ルクス

「ルクス君をしばらく二人の部屋にとめてやってくれんかの？まだ住む所決まっとらんのよ」

「げ」

「なっ？」

一体何を考えているんでしょうかこの妖怪は？やはり人間同士の常識と言うものは理解できないのでしょうか。ほぼ初対面の男女が行き成り同棲などで
出来るわけ無いじゃないですか。普通の女性ならそんな事は嫌がるはずです。そう思いながら僕は困惑した目で近衛さんと神楽坂さんたちの方を見ました。

・・・あれ？近衛さんはＯＫ的な顔になってますよ。でも神楽坂さんは嫌そうです。というかさっきの「げ」は聞こえていますからね。そんなに嫌ですか、そうですか・・・。
僕の防弾ガラスのように繊細なハートに皹が入りましたよ・・・。

地味に落ち込んでる僕を見た神楽坂さんが「大体あたしはガキが嫌

いなんですよ！」って更に追い討ちを・・・ああ、輝が亀裂に・・・。

落込んでいる場合じゃないですね。僕もさすがにこれは黙っておけませんので。

「大丈夫ですよ、学園長、それに近衛さんと神楽坂さんも。こっちへ来る前に駅周辺で住宅情報を検索済みです。もよりの不動産屋にも電話で聞きましたし
あれだったら一週間あれば入居可能ですよ。」

それを聞いて学園長が、え？って顔をする。一応こんなこともあろうかと調べておいて正解でした。

「とりあえず、部屋が正式に決まるまではウィークリーマンションかビジネスホテルで寝泊りしますので、二人に迷惑はかけませんよ。」

と、言うと近衛さんにもう反発されました。

「駄目やって！子供一人じゃ大変やろ？ご飯とか洗濯とかどうするん！？」

「アスナも！ルクス一人じゃ可哀そうやん！！暫く我慢してぇな！！」

さっきとは違う強硬な姿勢を見せる彼女に僕も神楽坂さんも反論できず、僕はとりあえず下宿が決まるまでお二人の部屋に居候するこ

とが強引に決められました。
神楽坂さんもかなり不服そうでしたが、一応納得していました。それを学園長は微笑ましそうに見ていました。この妖怪め・・・
取りあえず二人の部屋に居候する事が決まったし、神楽坂さんにはまだ挨拶もしていませんので改めて挨拶をすることにしましょうか
僕は二人の方へ向き直り姿勢を正し、
「ルクス・アヴェスターです。近衛さん、神楽坂さん、よろしくお願いします。」
と深々とお辞儀する。すると
「『神楽坂さん』じゃなくて名前で呼べばいいわよ、歳も近いんだし。木乃香もそれの方がいいでしょ？」と神楽坂さん、いや明日菜さんが言う。
「うちらも名前で呼ぶから丁度ええな～。」っと微笑んでる近衛さん、いや木乃香さん。
改めて二人の名前を呼んでお礼を言った。その後僕らは学園長室を後にしてそのまま二人の寮に行った。

・・・・・・嵌められた・・・・女子寮って・・・・しかも女子校って・・・そんなの聞いてない・・・・

この晩、僕は学園長（ぬらりひょん）に怨嗟の念を送った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1113y/

魔法先生ネギま～悪の正義～

2011年11月6日02時27分発行